

# 映像制作実習のレジュメ

## カット割り……映像の基本構成要素はカット

多くの人は、映画やドラマをひとつつながりの物語として見えています。しかし実際は、バラバラに撮影されたカットがパズルのように並べられているだけであり、それが、つながっているように見えているにすぎません。今日は、カット編集を中心にしてドラマ演出を分析してみようと思います。

### ●堤幸彦『愛なんていらねえよ、夏』（2002年）第2話（3分半）

駅のホーム。スタイリッシュでカッコいいモンターージュの代表例。

### ●川村泰祐『ランチの女王』（2002年）第8話オープニング（2分）

森田剛の乱闘シーン(1カメ撮影)。全5分間のシーンで約170カット。1カットあたり、平均1.76秒。

### ●福澤克雄『3年B組金八先生』（2002年）第6シリーズ第18話ラスト（1分半）

上戸彩の乱闘シーン(ほぼマルチ撮影)。全3分間で約95カット。1カットあたり、平均1.89秒。

お芝居重視の演出をすると手の込んだカメラワークはできない。

1カメ撮影——カメラワーク重視 芝居が断片化される。最近は、2カメの場合も多い。

マルチ撮影——芝居のライブ感を重視 カメラワーク(アングル)が制約される。

### ●羽住英一郎『伝説の教師』（2000年）第7話（2分半）

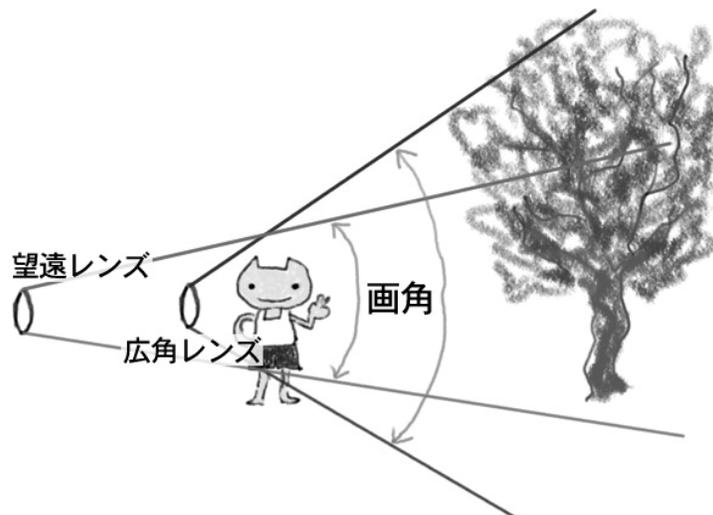
ここからは、脚本の内容とカット割りの関係に着目して話を進めます。カット割りは、野球におけるピッチャーの配球に似ています。演出家は、決めのカット(決め球)が強烈に見えるように、各カットを配列します。このシーンの決めのカットは米花剛史のアップ。

### ●森嶋正也『弁護士のかず』（2006年）第9話（5分）

(1) 喫茶店で、岡本麗が離婚届に印を押そうとすると映画『追憶』の主題歌が店内に流れる。カット割りの構造は上の『伝説の教師』と同じ。どんな決めのカットがでてくるのか予想してみてください！ トヨエツ弁護士が『追憶』の有名なセリフを口にするところで決めのカット。決めのカットは望遠レンズ。

(2) 終盤に登場する、上記の決めセリフをネタにしたギャグシーン。こちらの決めのカットは広角レンズ。

## カメラワークの基礎の基礎（望遠と広角）



出典 <http://ammo.jp/weekly/koh/0208/koh020821.html>



出典 <http://a100.blog.so-net.ne.jp/2006-08-13>

	望遠レンズ	広角レンズ
意味	ズームインの状態。画角が狭い。狭角レンズ	ズームアウトの状態。画角が広い。魚眼レンズ
特徴	被写界深度が浅い(背景や前景がボケやすい) 手振れが目立つ	被写界深度が深い(背景や前景がボケにくい) 手振れが目立ちにくい。手持ち撮影に便利
用途	シリアスなシーン。内面描写	コミカルなシーン。臨場感や空間の広さ(狭さ)を強調したいとき

## 広角レンズと望遠レンズの使い分けの例

### ●片山修・宮下健作『パズル』第1,2,3,6話（4分）

コミカルなシーンでは広角レンズを多用しているのに対し、シリアスなシーンでは望遠レンズを使った表情アップが多くなる。コミカルなシーンでは、石原さとみの顔アップを広角で撮って、その後ろに男子生徒3人組が映っているという構図が多い。ちなみに、第4話あたりから、コミカルなシーンにおける広角レンズの使用が減ってきているような気がする。

## 今期のドラマから、気になるシーンの分析

### ●渡辺武『ケータイ捜査官7』第2話（5分）

主人公が携帯電話型ロボットと会話するシーン。2人(?)の携帯が格闘する(シユールな?)シーン。CGなど、映像テクノロジーの進歩によって、実写とアニメーションの境界があいまいになってきている。単に技術的に可能になったというだけでなく、時間・コスト面での省力化によって、連続ドラマでも利用可能となった。主人公の少年とケータイのコミカルな描写も見どころ。

### ●水田成英『ハチワンダイバー』第2,5話（7分半）

- (1) 姜暢雄と対戦するシーン。カット数が異常に多いだけでなく、CG等による映像加工も多い。主人公がダイブする直前のシーンでは、25秒間で24カットもある。
- (2) 劇団ひとり、京本政樹と対戦するシーン。映像上のギミック手法を駆使して、シリーズ中でもっとも過激な演出になっている。一方、京本との対戦シーンは、対照的におとなしめの演出になっている。過激な映像演出という点では、すでにマンネリ～ネタ切れっぽい印象もあるので、今後の演出方針に変化があるかどうか注目したい。

### ●加藤裕将『ラスト・フレンズ』第1,3話（4分半）

- (1) 上野樹里が長澤まさみを見かけて追いかけるシーン。追いついて声をかけるシーン。カット割りや効果音がサスペンス風(登場人物の顔をなかなか映さない)。あえて、サスペンス風にする必要があるとは思えないシーンだが、演出上の基本コンセプトがサスペンスだということがよくわかる。第1話の後半に、同じシーンが回想で再登場するが、新たなカットが加えられて、印象ががらりと変わっている。
- (2) 食事中に錦戸亮がキれるシーン。サスペンスドラマでは、音響効果を考慮して、箸ではなく、フォークとナイフが使われることが多い。錦戸が立ち上がるカットでCMに入るところも秀逸。

### ●土方政人・佐藤源太『絶対彼氏』第3,4,5話（5分）

連続ドラマでは、複数の演出家が交代で演出を担当するが、演出家によって演出のトーンが微妙に違ってくる。このドラマの場合、伊藤源太Dが演出した回では、バラエティ的なドタバタ風の笑いが多い。一方、土方政人Dは台本の流れに忠実で、お芝居のニュアンスを重視した笑いが多い。

### ●佐久間紀佳『ホカベン』第1,2話/他（3分半）

このドラマは、脚本も音楽も演出も暗い。画面の色合いも青～緑を基調とした冷たい感じになっているが、ここでは事務所のセットに注目。机・パソコン・本棚といった備品から、机の上の資料類まで、メタリックまたはモノトーンな印象になるように統一されている(そうでない時もあるので、やや不徹底)。参考までに、ヒロインたちがくつろぐ居酒屋のシーンと比べてみてください。——これだけ暗くて重いドラマなのに、ヒロインの性格が単純バカっぽく見えるのは、キャラ設定上のミスなんじゃないだろうか？

### ●佐藤東弥『ごくせん』第1話（1分）

『ごくせん』は、最初のシリーズの時から、教室のデザイン～レイアウトが、非現実的でアブノーマルになっている。現実味のないストーリーなので、視聴者が現実の学校を連想しないように、意図的にそうしているのだと思われる。これに近い事例としては、『花より男子』『山田太郎ものがたり』『花ざかりの君たちへ～イケメン☆パラダイス』などがある。

### ●堀切園健太郎『篤姫』第21,22話（14分半）

- (1) 堀切園(ほりきりぞの)健太郎Dは、エキセントリックな映像演出が得意なディレクターで、『篤姫』ではタイトルバックの演出を担当している(コンセプトはクリムトだとか)。ドラマ本編の演出は、第22話までの時点で、第5、6、21、22話とわずか4回のみ。
- (2) 赤い照明を多用しているが、画面は暗めで、“不気味な赤”という感じに仕上がっている。他のディレクターが演出した第20話の回想シーンでは、改めて堀切園流にシーンを取り直している。
- (3) 21話では、大河ドラマらしからぬ『ショムニ』風のコミカルな演出をしている。一般的に、コミカルなシーンでは正面アングル、シリアスなシーンでは斜めアングルが採用されることが多い。
- (4) 21話、徳川家定が篤姫に「子をつくる気はない」と本音をもらすシーン。下から見上げるような視線は、相手の心を見透かして(覗いて)いるというニュアンスを出している。
- (5) 22話、家定が正体をばらすシーン。「いつまでもウツケのままではおられぬようになってしもうた」というセリフのみ、小さな声でしゃべっていて、録音の質感(マイク位置など)が違っている。このセリフの直後、家定は立ち上がって腕組みしながら話すが、上から下を見下ろすような視線になる。
- (6) 上に続く22話のエンディング部分。望遠レンズによる表情アップでカメラがゆれている。緊張感・心の動揺を表現する手法。決めセリフ「わしは誰も信じぬ」では、上述の下から見上げるような視線／アングルが再登場している。このアングルは、21～22話における堀切園演出の最重要ポイント。

### ●清水一彦・田中健二『バッテリー』第1,7話（4分）

- (1) 第1話の投球シーン。アイドルドラマで重要なのは、出演者の(演技力ではなくて)ビジュアルがドラマのキャラクターとマッチしていること。このドラマの場合、主役の鋭い眼が、心を閉ざした天才投手という設定に見事にマッチしている。
- (2) 主人公が周囲の人間と対立しているシーン。このドラマは、このようなシーンが多いが、主役の鋭い眼光を最大限に生かす方向でカット割りが組まれている。一般的に言って、目に力がある俳優は、演出～カット割りを考える上では使い勝手があって便利。